

地方巡礼の現在

身近な非日常空間の創造とその喪失

北九州市立大学文学部

野寄 綾

目次

はじめに

第一章 巡礼にみる「信仰」と「娯楽」

1・1 四国霊場

1・2 地方霊場

第二章 二市一群新四国霊場の縁起と歴史

第三章 千人詣における非日常空間をつくりだす仕掛け

第四章 日常空間を非日常化する仕掛けとその崩壊

第五章 考察

注釈

はじめに

卒業論文の題目に地方巡礼を選んだきっかけは、小倉の町のあちこちにある御堂の存在に気づいたことと、白装束を着た巡礼者の団体を目にしたことであった。現在の日本では日常生活における宗教行為が希薄になっている。しかし一方では、仏像を奉った御堂や巡礼のような宗教活動を行っている人々が確かに存在する。むしろ宗教の悪い面ばかりが浮き上がってしまう現代社会の中で、これらの身近な宗教はどのように存続しているのだろうか。私は現在の宗教活動の実体を確認しようと、1999年の4月1日から4月9日にかけて、福岡県北九州市に設置されている「二市一群新四国霊場」の巡礼「千人詣」に参加し、調査を行った。

この調査結果を本論文では、小嶋博巳氏による「地方礼状は日常を非日常化する仕掛けを持っている」という見解をもとに分析を行った(1987 小嶋)。二市一群新四国霊場のような地方霊場と、それを巡る地方巡礼には日常空間を非日常化する仕掛けがある。これによって創造された非日常空間は「信仰」と「娯楽」の両方の要素を持つ非日常性を生み出すことができるのである。

この視点において、二市一群新四国霊場の持つ非日常化の仕掛けを探したところ、「歩き」「接待」「巡礼期の限定」「服装」「記録」など、数多くの例を見ることができた。ところがその一方で「車の使用」「宿泊の習慣の喪失」「接待の衰退」などにより、非日常化の仕掛けが崩壊しつつあることもわかった。

なぜ、非日常化の仕掛けが崩壊してしまうのか。その理由は、地方巡礼が栄えた頃の人々と比較して、現代の人々の「非日常」を求める姿勢が変わ

ってきていることにあると考察する。そして同じく非日常的経験を得ようとする行為でありながら、地方巡礼の「自らの手で日常空間に非日常空間を創り出す」という方法と、現在の人々の「日常の外部に用意された非日常空間を享受する」という方法にある大きな違いを、本論文で明らかにしたい。

第一章 巡礼にみる「信仰」と「娯楽」

1.1 四国霊場

巡礼は宗教活動の一種であり、数多くの宗教に存在する。一般的に定められた聖地を巡り歩く(註1)行為を巡礼という。そのもっとも有名なものにイスラム教徒生涯の悲願としてのメッカ巡礼があるが、国内での巡礼としてすぐ思い浮かぶものといえば四国の八十八カ所霊場巡り、いわゆる「遍路(註2)」であろう。

四国八十八カ所霊場は弘法大師にちなんだ八十八カ所の霊場を巡る巡礼地として日本でもっとも規模が大きく、かつ現在も盛況なものの一つである。白い笠摺(おいずる)(註3)をきて、金剛杖(註4)をつく巡礼者は「お遍路さん」の名で親しまれている。四国八十八カ所霊場の起源は1200年前に弘法大師が修行として巡った地とあるが、これはあくまで伝説である。『巡礼の社会学』によると、霊場は当初、僧の修行の場であったが、江戸時代にはいと次第に庶民が足を運び始めた。そして経済的・文化的に栄えた文化・文政時代において、巡礼は信仰と観光を兼ねた旅として一大ブームになったという(前田 1971)。

現時点では、巡礼の全行程は約1450キロメートルにわたる。八十八カ所の礼所をすべて徒歩で巡るには最低でも40～50日を要する。しか

し、近頃は観光バスやタクシー、自家用車、さらにはヘリコプターなどの移動手段を用いる人、また少ない休みを利用して短期間で数カ所だけを巡る人、旅行会社でくまれたパックツアーを利用する人など、現代のライフスタイルに合わせた巡礼方法を選択する人も多い。現在四国八十八カ所霊場に訪れる人々は年間約10万人にもものぼる（ブルーガイド編集部 1998）。

四国遍路といえば忘れてならない有名な習慣として「接待」がある。札所を巡り歩く遍路に地元の人が無償で食べ物や日用品を施すことを「接待」といい、同じく無償で旅人に提供する宿を「善根宿」という。どちらも、遍路への善行は弘法大師への善行と同じ事であるという大師信仰に基づいた風習である。『巡礼の社会学』によれば、この風習は現在よりも交通機関や宿泊施設が未発達で経済的にも苦しい旅をしいられた時代に、旅の負担を軽減し、経済力の弱い女性や百姓の四国遍路の増加に貢献したという。さらに純粋な旅人の増加だけでなく、やむにやまれぬ事情で、もはや故郷に帰ることができない人（たとえばハンセン病患者）の最後の行き場としての四国霊場を成立させ、乞食遍路・職業遍路・病人遍路といった接待を当てに生活する遍路を生み出した。また、そのような社会的弱者の巡礼支援となった反面、接待で利潤を貪ろうとする悪質な偽遍路の発生も促した（前田 1971）。

全国から集まる遍路の目的は様々である。巡礼は宗教活動の一種だが、巡礼者の動機は単純に宗教心や大師への信仰だけではない。切実な願掛け、死者の供養から、観光、ウォーキング、一種の自分探しの機会としてなど、巡礼に見いだすものは人によって様々である。個人的な動機以外にも、

『巡礼の社会学』によると戦前には四国遍路を成人の儀式として利用している地域が多数あった。村の若者衆や娘たちの集団が、一方では大人として認められるための試練として、もう一方では同世代の仲間と楽しむ旅として四国八十八カ所霊場を巡ることがあった（前田 1971）。

四国八十八カ所霊場は霊場開設当初こそ純粋に宗教目的を達成する苦行の場であったが、江戸時代以降庶民が遍路に訪れるようになってからは徐々に娯楽的要素を強め、四国遍路は巡礼だけでなく観光旅行としても機能するようになった。現代の傾向としては、ますます宗教性が薄れ観光やウォーキングなどの娯楽性が強まっている。市販されている四国遍路のガイドブック『四国八十八カ所安らぎの旅』では、「四国霊場巡りは巨大なテーマパークだ」、「信仰と観光をミックスしたパフォーマンスの旅であり、ウォーキングだ」という言葉で紹介されている（ブルーガイド編集部 1998）。

このように一般に巡礼とは宗教行為であり宗教心に基づいた行動と思われがちであるが、四国遍路に限らず巡礼は必ずと言っていいほど「娯楽としての旅」という側面を持っている。神聖な霊場を物見遊山で訪れることに対して嫌悪感を示す人も多いが、「信仰」と「娯楽」のどちらも四国遍路を語る上では決して欠かすことのできない要素であると私は考える。

1・2 地方霊場

さて、この四国八十八カ所霊場を手本とした四国霊場の地方霊場版として「新四国霊場」がある。地方霊場とは全国的な知名度をもたず、限られた地域の人々だけが巡礼する霊場であり、またこの

ような霊場を巡礼することを地方巡礼という（小嶋 1987）。地方霊場の中でも四国八十八カ所霊場や西国三十三カ所観音霊場のような全国に名の知られた霊場をモデルとしてたてられた地歩熟れ霊場を「うつし霊場」といい、特に四国霊場をモデルにしたものは「新四国霊場」と呼ばれる。新四国霊場が各地で創設されるようになったのは江戸以降のことだ。『全国霊場事典』で紹介されている四国八十八カ所霊場のうつし霊場のうち、もっとも古く設立されたのは1635年の三河新四国八十八カ所霊場、もっとも新しいものは1995年関東八十八カ所霊場と350年以上に渡って創設はおこなわれているが、そのピークは四国遍路が盛んになったのと同時期の江戸時代中期から後期にかけてであった。現在、新四国霊場は全国各地に存在し、その規模は淡路島、小豆島、愛知の知多半島、九州の篠栗など、本家の四国八十八カ所霊場に劣らない規模や寺院を持ち、地方霊場でありながら当地以外からも多くの参拝者が訪れるものから、本論文で取り上げる二市一群新四国霊場のごく限られた地域で行われる小規模なものまで様々だ。『全国霊場事典』によると、うつし霊場は日本全国に観音霊場が611カ所、八十八カ所霊場が384カ所存在するという（塚本1997）（註5）。

地方霊場が作られた目的は、主として四国霊場を巡るには事情が許さない遠方の人のために、より容易に巡礼を可能にすることにある。交通機関が発達した現在ならいざ知らず、それ以前の旅とは経済的・肉体的な困難と危険が常につきまとう行為であった。ゆえに新四国霊場の持つ特色としては本家の四国八十八カ所霊場に比べると易行で、巡礼にかかる時間が少なくすむという点が上げ

られる。また、四国八十八カ所霊場を模したとはいえ、限られた地域で信仰されていることから、非常に地域性が強いという特徴をもつ。例えば札所は必ずしも八十八カ所に定められておらず、その地域の都合によって札所の数・位置はたやすく変化することや、巡礼を行う期間が定められていたり、歩き方に規則があったりするなど、その地方にしかない独特の習慣を持つことなどがある。

そしてこれら易行・地域性といった性質に関連する地方巡礼のもう一つ重要な特徴として、「世俗性」がある。地方巡礼は本家の四国八十八カ所霊場が持つような伝説や宗教的伝統から自由である分、宗教的な「聖」の側面が乏しく、さらに霊場の在地が日常空間と隔てが少ないため必然的に「俗」の面が色濃い。ところが、この世俗性の強さが「聖」を求める霊場としては欠点になる。霊場が「聖」なる空間を存続するには神聖さ・神秘性のような非日常性が不可欠であるからだ。

小嶋博巳氏は『仏教民俗学体系』の「地方巡礼と聖地」において次のように述べている。

「ムラの生活領域の内側やその周辺に成立した地方霊場では、遠方の大巡礼場がもつような日常性との距離を確保することは困難であり、そこに日常性から隔絶した空間的な聖性は期待しにくい。そこでこのような場所が巡礼の聖地として機能するためには、巡礼空間を非日常化し、聖化する何らかの仕掛けが必要となってくる。」

さらにその仕掛けとは次の3点にあると小嶋氏は指摘する。

第1点は「巡り」という行為自体にある。日常の居住空間を決められた道筋に沿って徒歩で歩くことにより、日常生活とは異なる空間認識が得られる。加えて地域によっては一度行った道は決し

て通ってはならないなど、歩き方に規制を設けており、これは巡り歩く行為の非日常性をより強める効果を持つ。

第2点に「接待」があげられる。接待が四国霊場の慣行をもしたものであること、また食物の授受が旅人と定住者の間のやりとりであることから、接待を行うことによって巡礼空間に「旅」の雰囲気を出せることができる仕組みである。また接待は人を施す側と施される側の2種の立場にわけ、そこに漂泊者と定住者という普段とは異なる関係性を生み出している。

第3点は「巡礼期の限定」である。地方巡礼は巡礼期のある特定の時期に限定しているところが少なくないが、これは時間における非日常性を演出する効果がある。つまり、期間を限定された巡礼は一種の「祭り」となって、巡礼中それに関わる人や物に日常とは違う意味を与えるのである。

第1点の日常空間をあらためて歩くという行為自体で非日常空間を体感するというのは、私自身も調査で行った巡礼中に経験している。小倉の市街地を歩いたときだった。普段は駅に向かうなり、付近の店によるなりの目的を持って早足に通り過ぎる土地を巡礼でゆっくり歩いたとき、周囲の人々や車が普段の私と同じくめぐりまわって行く中で、私は自分の時間の流れとのあいだにある隔たりを強く感じた。よく知ったはずの空間が全く別物に見えた瞬間であった。日常空間が非日常空間に変貌したのである。

ところで小嶋氏は非日常空間の仕掛けによって作られる非日常空間に生まれるものを聖性に絞って話を進めている。しかし生まれるのはそれだけではない。非常に世俗的な非日常性、すなわち「娯

楽」も同様に発生すると私は考える。四国遍路の説明でも言及したように巡礼には必ず「信仰」と「娯楽」という2つの面が存在する。非日常化の仕掛けはその両方を生み出す非日常空間を創造するのだ。とりわけ易行・地域性・世俗性の特徴を持つ地方巡礼では「信仰」以上に「娯楽」が重要なポジションを占めているのである。

第2章からはフィールドワークによる調査の対象とした二市一群新四国霊場の事例をあげて、「信仰」と「娯楽」の両面を生み出す非日常化の仕掛けを具体的に検討していこう。

第二章 二市一群新四国霊場の縁起と歴史

私が調査対象とした福岡県北九州市におかれている二市一群新四国霊場は、四国八十八カ所霊場をモデルとした地方霊場である。毎年4月1日から9日までの期間(註6)に北九州市周辺の人々が集まって巡礼を行う。この巡礼を特に千人詣(センニンマイリ)という。千人詣をおこなう人々の集まりを二市一群大師講と呼び、その本部は北九州市下城野にある光明寺である。また、四国遍路が八十八カ所の札所を廻ったあと、その報告をするために高野山を訪れるのに倣って、4月18日には光明寺において巡礼に参加した人が集まり、「千人詣巡拝結願大護摩祈願法要」が行われる。この日は大般若経(註7)を転読(註8)し、また、千人詣の全行程に参加した人には小乗と記念品が贈られる。

続いて二市一群新四国霊場の縁起、すなわち創設に至った経緯と、現在に至るまでの変遷を叙述する。

二市一群新四国霊場の縁起と歴史を記述するために、2つの資料を参考にした。1つは二市一群

大師講本部がおかれている光明寺の現住職である釜瀬光弘さんのおはなしである。釜瀬さんは光明寺の2代目住職で、二市一群新四国霊場における千人詣の中心人物である。毎年3月になると4月に行われる千人詣の日程を一人でたて、日程表を参加者に配布している。実際の千人詣でも巡礼者の指揮を執っている。

もう一つは光明寺に保存されている企救郡大師講の記録である。企救郡大師講とは二市一群大師講の昔の名称である。豊前の企救(註9)に設立されたため、設立当初から昭和初期まではこの名で呼ばれていた。本冊子には和紙の原稿用紙に毛筆の手書きで、総365ページにわたり、設立当初から明治38年までの記録がなされている。これは創設における中心人物の一人である三波仙蔵氏が創設当初から書きとめていた大師講の記録を明治40年に編述したもので、永らく三波家に保管してあったのを光明寺が譲り受けた。記録内容は、縁起、祈願文、趣意書、格札所とその世話人名簿、出身地別に分けられた巡拝者名簿、接待品とその主人名簿、大般若経の施主人名簿、千人詣における宿泊者名簿等である。

三波氏が何の目的でこのような綿密な記録を書き残したかは非常に興味深い点だ。本誌によると次代の大師講に役立てて欲しい、世話人や参拝者の功德を功績として残したいとのことだが、私はこの記録自体が大師講を特別な行為として意味付けさせる役割を背負っているのではないかと推察する。実際にこの記録をはじめて目にしたとき、記録の量とその中身の細かさに驚き、二市一群大師講が確かに100年以上前から続いていることをただ話しに聞いたときよりもはるかに強く実感した。また、三波氏自身はこの記録を家宝として三波家

に受け継いで欲しいとも書き残している(残念ながらその願いはかなわなかったが)。このことから三波氏が大師講に高い価値観を見出し、それを記録という形で残そうとしていたことがわかる。この三波師の思いが記録という形で外在化されたことにより、大師講自体に価値として加わった。すなわち三波氏が記録を書きとめたことで、企救郡大師講に歴史的な背景と行為の特別性が付与されたのである。

二市一郡新四国霊場の始まりは明治25年にさかのぼる。明治25年3月20日、徳光の佐野中右エ門、山本の日吉岩蔵、葛原の三波仙蔵などの人々が小倉の寺町地藏院大師堂にておこもり(註10)をしていたところ、三波氏が日吉氏に「この企救郡に四国霊場を移してはどうか」と提案し、日吉氏がこれに同意した。そこで両人は同郡の人々、長野の青木平太郎、頂吉の田村友吉、黒原の中村浅次郎、小倉大阪町の三和田久吉たちと6月10日に集まり協議し、8月1日より企救郡内の霊場たるべき所を調査して、札所を定めた。翌年の明治26年1月25日から総代として佐野忠右エ門、三波仙蔵、および随行員として城野の荒川兼吉、三獄の三村浅之介、中津口の中村亀次郎の5人が、四国霊場の88ヶ所の札所から土砂を企救郡の札所に迎えるために巡礼へと出発した(註11)。88箇所の札所だけでなく番外札所(註12)にも参拝し、同年3月14日に帰郡した。同月16日より真言宗各寺院の導師に依頼して、企救郡内の格霊場に巡拝し、土砂を納める儀式を行う。これが第1回目の千人詣である。日数は10日間、参加人数は85名であった。また、このときには宿泊の慣習があり、千人詣中巡礼者は打ち納め(註13)をした札所付近の有志が提供する家々に宿泊していた。この宿泊という行

為は1日の巡礼が終わっても、次の日まで非日常感を持続させ、また見知らぬ人間同士の交流も図って日常とは別の新しい人間関係を形成する機能を持つ。

翌年から毎年千人詣はつづくこととなる。参加者も年々増加し、明治32年には492名が参加している。ただしこの巡礼者数は全日程に参加した人だけでなく、一部行程のみ参加した人もあわせた人数である。1日後との宿泊記録を見ると、宿泊者数にばらつきがあり、日によって参加者の増減があったことが分かる。

明治27年9月、日清戦争で戦地に赴く日本軍のために祈祷を行なう。これ以降日本軍の戦勝祈願、戦没者供養の祈祷は明治37年まで毎年行なわれている。

明治30年に大般若経を購入する。

昭和初期、名称が企救郡大師講から二市一郡大師講に改名する。

昭和8年、有志の土地提供によって現在の小倉南区城野に光明寺が建てられる。同時にそれまで現在の小倉南区北方1丁目のバス停付近にあった大師講本部が、光明寺に移される。

戦時中は一時中断されていたが、戦後昭和21年に復活する。しかし現在の八幡東区にある札所にはこれ以降行かなくなった。

昭和40年頃は200人ほどの人々が参加していた。

昭和50年頃、宿泊の習慣がなくなる。

1990年代のバブル崩壊以降は不況のせいで、主婦業の人はパートに出る必要ができ暇がなくなったり、仕事を持つ人は仕事の休みがとりづらくなったため、参加人数が激減している。

今日設立時の札所で現在も巡っているのは4分

の3程度で、欠番や存在地を把握できない札所がある。また、戦後足を運ぶことのなくなった八幡東区の札所に加えて、門司区、京都郡の札所もなくなっていない。

さらに、現在ではいくつかの慣習がなくなってしまっている。現在4月18日に行なわれている千人詣巡拝結願大護摩祈願法要は元々1日だけでなく3日間の行事であり、この期間はおこもりしていた。また、大正から昭和にかけては千人詣において若い人同士の見合いがあった。北九州一帯の様々な地域の人々が集まるため、当時の若者にとっては絶好の出会いの場であったのだろう。

第三章 千人詣における非日常空間をつくりだす仕掛け

私は平成11年4月1日から4月9日までの9日間、千人詣に同行した。前年までは10日間かけて廻っていたが、今年は9日間に短縮された(註14)。

1日ごとの参拝した場所とその順路の記録を表1~9にまとめた。毎日8時に指定の札所に集合する。集合場所は1日目を除いて前日の打ち納めをした札所の次の札所となる。

1日の全行程を終えるのは、その日によってばらつきがあるが、15:00~17:00ころである。

昼御飯は各自が弁当を持参する場合と、昼休みをとる場所とされた札所の世話人が食事を用意してくれる場合と2通りある。

以下では巡礼の様子を、特記すべき項目ごとに分けて記述しよう。

参加者

参加者人数は9日間で最大30人、最低で15人だった。全行程を通して参加する人は少なく、都合

が合うときだけ参加するタイプの方が多い。特に曾根付近を廻る4日間は、この日だけ参加する曾根の人が多かった。曾根在住者である1人の女性は「毎年曾根付近を廻る日だけ参加する。この近くを廻って疲れたら帰る。自分はそういう主義。」と自分なりの千人詣の参加方法を語ってくれた。

参加者の中心層は中年から初老にかけての女性である。

小学生が全行程あわせて5人いた。みな父母、もしくは祖父母に連れられて参加していた。

参加者の中には会計と先達が1人ずついる。

会計係りは札所の世話人からお布施を受け取り、その領収書を書き手渡す役である。

先達は大師講の旗を持ち、巡礼者たちの先頭に立って歩く役である。そこで先達たちは巡る霊場の道順を全て覚えていなくてはならないが、実際のところ、今回の千人詣の先達は道順の一部しか知らず、彼より住職の釜瀬さんや長年千人詣に参加している巡礼者のほうが詳しかった。先達は初老の男性で、先代の先達だった自分叔父が亡くなってから役目を受け継ぎ、4年前から先達をつとめていうそうだ。

札所

札所とされているのは、寺院、御堂、個人宅、公民館、道端の石碑などである。札所には二市一郡新四国霊場の札所であることを示す白いプラスチック製のボードが設置されている。そこには札所の番号、地名、堂・寺の名称、本尊が書かれている。中には札所の番号が書かれていないものもあるが、これは戦後に新しく加わった札所であることを意味する。しかし、このボードが設置されているのは全体の半分ほどである。

札所が置かれている本尊には、弘法大師、薬師如来、不動明王、地藏菩薩、観世音菩薩、釈迦如来、大日如来、阿弥陀如来、虚空蔵菩薩、十三仏などがある。仏像以外に、五社明神、供養碑を奉っている札所がそれぞれ1ヶ所ずつあった。ほとんどの札所は本尊以外にも複数の仏像が置かれていた。

いくつか札所ではない個人宅へお参りに行った。これは亡くなった人の供養にと巡礼者にお参りを依頼した家である。ゆえにお参り先には年によって増減がある。

札所の中には山中に建てられているために、道が険しい場所もあった。そのような場合、体力のない人や脚の悪い人は山道に入る手前でとどまり、巡礼者は札所と山道に入る手前の2ヶ所に分かれてお参りをした。

札所は別の霊場の札所と兼ねているところがある。例えば中谷付近の札所は「東谷新四国霊場」の札所でもある(註15)。

巡礼者が札所に巡礼行くと、普通そこには札所の世話人がいて接待を施してくれる。世話人は札所の維持管理をしている人で、普段は札所を清掃したり、仏へ供物を上げたりしている。札所の世話人は個人宅や寺院では当然家人だが、共同の札所では近所の人々が世話をしている。こうした場合特に婦人会が多かった。ところが最近は札所の維持管理ができなくなってしまった世話人や、札所の世話はできても千人詣のときの接待はできないと参拝を断る世話人が増えてきている。誰も世話人がいないお参り先が今回の千人詣でもあった。住職の釜瀬光弘さんは、人の出入りが激しい市街地の札所に将来世話をする人がいるか心配していた。

参拝方法

札所での参拝は、通常以下の手順で行なわれる。

1 お賽銭をあげる。

お賽銭の額は1人5円である。賽銭箱がある札所は個々にその中に入れるが、賽銭箱は代用品として皿やお盆を使っている札所では巡礼者の1人が皆から賽銭を集めてまわる。本尊以外にも仏像が多数ある場所では1体ずつあげる人もいる。

2 木魚をたたきながら般若心境を唱える。

直径5センチメートルほどの携帯用の木魚をたくさん。持っていない人は手を合わせている。

3 鈴を打ちながら御詠歌をうたう。

御詠歌は札所の本尊にあわせたものを歌うが、札所に御詠歌を記載した額や木札があるときはそこに書かれた御詠歌をうたう。基本的には1つの札所で1つの御詠歌をうたうが、札所によっては2つ、もしくは3つの異なる御詠歌をうたう場合もあった。住職の釜瀬光弘さんをはじめとする御詠歌を完全に覚えている人を中心にうたうのだが、耳で聴いて覚えた人だけが教本を見ながらうたっている人もいた。私は節も言葉もわからないのでひたすら黙って手を合わせていたが、大人数で声を張り上げて同じ御詠歌をうたう行為には、独特の精神的な高揚と一体感を感じた御詠歌には大和流や金剛流といった流派がある。ここでうたわれているのは基本的には金剛流であるが、正式に習った人が少ないこともあり、正確な金剛流とはいえないようだ。

4 斉唱

「願わくはこの功德をもってあまねく一切に及ぼし、われらと衆生と皆共に仏道成ぜん」と参加者全員で唱える。般若心経も御詠歌も分からなかったが、これだけは9日間のうちに覚えて、後半私

も唱えることができた。

5 接待を受ける。

札所の世話人から接待品を受け取る。これは「接待」の項目で詳しく記述する。

このほかに、1から4の手順の間に札所によっては真言や「南無大師遍照金剛」を唱えることもある。また、1日の最初に廻る札所(集合場所)では、三帰文(註16)、十善戒(註17)等を光明寺住職の釜瀬さんに続いて唱える。同様に打ち納めや昼食時用の決まり文句もある。

服装・持ち物

巡礼者は、白衣または白い服、笠摺、帽子、御袈裟(註18)、白い手袋、紫の装束、ジャージ、スニーカーなどを身につけている。基本的には歩きやすさを中心に考えた服装である。巡礼の服装としては白衣に笠摺を羽織るのが一般的だが、白衣を持たない人はなるべく白っぽい服でそろえている。中にはごく普通の、ハイキングにでも行きそうな格好の人もいた。紫装束は、冬に二市一郡新四国霊場の一部を巡礼する「寒行」を経験した人に光明寺から配られる物で、5人前後が着用していた。

服装は巡礼者であることを周囲にも自分自身にも意識させるものである。白衣や笠摺といった白装束は死出の旅路へ向かうという意味をもち、それまでの自分と巡礼者となった身の決別を表す。

私自身が調査中に得た印象では、巡礼中は同じ白衣を着た参加者が大勢いるので自分が白衣を着ていることはほとんど気にならない。しかし1日の行程を終えて自宅へ帰るとき、見知らぬ人から白衣を着た自分への一瞬の視線を感じ、周囲にとってそのときの自分の存在が異質であることを思

い知った。

巡礼者の持ち物は、杖(代用品として傘)、数珠、頭陀袋(註19)、リュックサック、鈴、携帯用木魚、ビニール袋、雨合羽、賽銭用の5円玉と1円玉、などである。ビニール袋は接待として出された漬物や煮物、バラで出されたお菓子などが食べきれずに残ったときのそれを待って帰るという用途と、雨天のとき雨合羽では防ぎきれない靴やかばんを雨で濡れないようにする用途がある。頭陀袋以外のかばんは歩きやすさを考えてリュックサックである。しかしお参り先で振舞われる接待品の品はともにかばん一つでは入らないため、手提げ袋を別に持参している。

交通手段

巡礼中の移動手段は基本的には徒歩である。しかし今回の千人詣では全行程の約半分を車で移動した。

自家用車を使ったのは、主に札所間の距離が遠く、なおかつ交通の便が悪い地域を廻るときだった。それ以外でも常に自家用車は随行して脚の悪い高齢者や、持ちきれなくなった接待品などの荷物に乗せていた。住職の釜瀬さんの話によれば、自家用車を使い出したのは、1995年、もしくは1996年からだそう。自動車を運転できる釜瀬光弘さんの息子の若和尚が、修行を終えて小倉に戻ってきたのがきっかけだった。

バスを使う場合もある。しかし自家用車に比べればその利用は非常に少ない。

接待

接待で施される品は大きく分けて、その場で振舞われるものと持ち帰りようのもの2種類があ

る。

前者は飲食物に限り、お茶、おにぎり、煮物、漬物、日本酒、ビール、蒸かしたサツマイモ、ゆで卵、揚げ物、和え物、ちくわ・はんぺん、ウィンナー、かまぼこ、こんにゃく、串等である。これらが大きな皿やお盆に載せて出される。もっとも頻繁に振舞われたのはお茶だった。4月7日の打ち納めの場所では特別に、地面に敷物を敷いて軽い食事が出た。ちょうど桜の咲く時期だったのでちょっとした花見であった。また、合馬の近くの札所では筍の産地らしく筍の煮物が良く出された。

校舎の持ち帰りの品には、お菓子、果物、軍手、パン、ジュース、お金、ティッシュペーパー、置物、タオル、餅、海苔、タッパ、ちらし寿司や炊き込み御飯をケースに詰めたもの、花、栄養ドリンク、カレンダー、インスタントラーメンなどがあつた。複数の品をビニール袋に詰めたものもあつた。接待品は非常に多く、私が9日間でもらつた品は、みかん箱ほどの大きさのダンボール箱7箱分にも及んだ。

接待をしてくれるのは、お参り先の札所の世話人である。直接世話人が出てきて接待品を渡してくれる札所と、接待品だけが置いてある札所があつた。ある札所では新しく大師像を建立したお祝いにと、千人詣の参加者とその近所に住む人たちに餅まきをした。

年配の参加者の話では、子どもの頃は接待品がもらえるのが嬉しくてそれが目当てで巡礼に参加していたそう。今の子ども達も接待品がもらえるのは嬉しそうではあるが、それ欲しさに参加したがるといった雰囲気は見られなかつた。昔の子どもに比べれば今の子どもは物が豊富にあるからだろう。

接待において注目すべき点は、接待品の量の多

さと品目の豊かさにある。三波仙蔵氏の記録から明治期の接待品の品目を見ると、お茶、和え物、みかんなど、特別豪勢な物ではなかった。釜瀬さんや千人詣の古くからの参加者に聞いた話でも昔の接待品は質素であった。昔と比べて現在の接待品がより豊かになったことについては、世話人の接待にかける意気込みが以前より増していると考えより、現代が物の豊かな時代であることを背景とした現象と私は考える。なぜなら地方霊場は生活空間に近い分だけ生活様式の変化に影響を受けやすいという性質があるからだ。いずれにせよ、過剰なまでの接待品の量と品目の豊かさが、千人詣の特別性を形成するのに必要な役割を果たしていることは間違いない。接待は現在の千人詣に見られる非日常化の仕掛けの中でも、もっとも非日常空間を支えることができている1つであるといえる。

ただしその一方で、巡礼者が来ても接待ができないからお参りを断る世話人がいることも留意しておきたい。お参りが来るのが平日の昼間なので時間の都合がつかないこと、30人分の接待品を用意するのが困難であることなどが巡拝を断る主な理由である。またそれ以前に札所そのものの維持ができなくなってしまった場合もある。もし接待という行為がなくなれば、それは非日常空間を演出する仕掛けが1つ失われることを意味する。

動機

調査では千人詣の参加者になぜ巡礼するかについての個人的な動機を尋ねた。その際の発言をもとに巡礼に参加する理由を健康のため、家族や友人・知人の影響、信仰心、楽しみの4つに

分類した。以下ではそれぞれの動機について解説を加えながら列挙してみたい。

健康のため

歩くことによって健康を保とうと考えている。比較的高齢の巡礼者に多い答えだった。

- ・ 歩くのは健康のため。
- ・ 歩くと体が軽くなる。
- ・ 「おばあちゃんたちは歩けること、つまり健康であることがありがたいと思っているのではないかねー。」

家族や友人・知人の影響

家族が巡礼に参加している（またはしていた）のに倣ったり、友人に誘われたりしたことがきっかけになっている。

- ・ おばあちゃんが昨年入院したので代わりに。服や道具はおばあちゃんの物を譲り受けた。
- ・ おばあちゃんに連れられて2日目のみ参加。「楽しい？」ときくと「う～ん。」と答えた。（小学校低学年の男の子）
- ・ 篠栗の札所の1ヶ所に毎月お参りしている。なぜならそこは自分の先生（旅人、行者）が修行した場所だから。

信仰心

巡礼本来の目的にもかかわらず、信仰心、もしくはそれに準ずるものを参加動機に挙げた人は少なかった。しかも明確で自覚的な信仰心を口にする人は皆無で、心の安らぎのような精神的なものや古くから続いた習慣への義務感をあげた人が多かった。

- ・ お参りするだけで無心になれる。
- ・ 子どもの頃から60年以上いろんな霊場の千人詣をしている。趣味であり仕事の

ようなもの。

- ・ 心が安らぐ。

楽しさ

巡礼の楽しさと一口に言ってもいろいろあるが、その中でも歩くことに楽しみを見出している人は多かった。特に「歩きたいから参加した。」という人には非常に明確な目的意識が見られた。しかし彼らは目的を語ると同時に「自分は信仰心で巡礼に参加していない」と言うことが多く、巡礼が本来宗教活動であることに気兼ねしている様子も感じられた。

- ・ 自分は偽巡礼で、歩くこと自体が楽しい。毎年篠栗の奥ノ院に行ったりする。山歩きも好き。自分にとっては山歩きとかわらない。
- ・ 万歩計をもっている。鄙びた静かなところを歩くのが良い。
- ・ 明日(話を聞いたのは3日目)は「小倉を歩こう会(註20)」に参加するので休む。歩くのが趣味。毎日1時間かけて歩いて観音様を参る。

ただ歩くのではなく、大人数で一緒に参加するのが楽しいと答えた人も多かった。長い道のりでも皆で話しながら歩けば、歩くことの辛さも苦にならないそうだ。それに大人数で集まることで新しい出会いがあったりと、普段とは違った付き合いができるのも面白みの一つであろう。

- ・ みんなで廻ると歩く距離も短く感じる。
- ・ みんなで歩くのが楽しい。

巡礼者の中には長年千人詣やそれ以外の各地の霊場にもいくつも赴き、巡礼を趣味のように思っている人がいる。

- ・ 千人詣や四国以外にもあちこちを巡って

いて、四国には20数回行っている。「四国はいいよ。好き好きは人それぞれ。私は20、21番や12番(かなりの難所だそうだ)の札所が好きだけど、他の人は他の人で好きなところが、感動する札所がある。」「19番はあまり好きじゃない。」

- ・ 月参り(註21)も毎月いくつか行っている。住職や他の人に連れられて団体で四国や西国へ行った。四国は4回ぐらい。[約10年前から参加している女性。45、6歳のときから約20年間参加し続ける。]

参加理由としては誰も上げなかったが、参加者の様子を観察する限りでは接待をもらえることも楽しみの一つだろう。

その他に以下のような発言があったことを付記する。

- ・ 「自分も本当は廻りたいけど接待があるからねえ。」[接待をしている人]
- ・ 1日歩いて疲れても次の日朝起きるとまた歩こうという気になる。
- ・ 1年に1回仕事を休んで参加。これ以外お参りはしていない。「楽しいですか？」と聞くと「別に楽しいわけではない。」

「なぜ千人詣に参加しているのか。」という質問に対して、巡礼本来の目的であるはずの宗教心を理由に挙げる人はごく少数であり、宗教行為であることに明確な自覚を持っていない人がほとんどであった。先に述べた通り、元々千人詣にかぎらず地方巡礼は娯楽要素が大きいという特徴があるが、発言内容はその裏づけとなる。

しかしここで最も注目したいのは、多くの人に

とって巡礼の参加動機は1つだけでなく、いくつも重なり合っていることだ。以下の発言は巡礼者の1人が語ったものである。

- ・ 「お参りするのが好き。好きじゃないと、それかある程度宗教心がないとできない。みんなで話したりするのが楽しい。足のためにも良い。」

この言葉の中には分類した4つの理由全てが含まれる。先に参加動機を分類したが、これらの動機を単体であげる人は少なく、ほとんどの巡礼者は複合的に答えていた。言い換えれば、単なる信仰や娯楽のためだけでなく、それら異なる複数の欲求を同時にかなえてくれる行為として千人詣を位置付けることができる。

第四章 日常空間を非日常化する仕掛けとその崩壊

これまで見てきたように、二市一郡新四国霊場と千人詣には「日常空間を非日常化する仕掛け」が数多く配置されている。小嶋博巳氏が霊場を聖地として成立させるための地方巡礼特有の例としてあげた「歩き」「接待」「巡礼期の限定」の3点も確認された。歩く行為の効力は私自身身をもって体験できた。また接待の慣習は創設当初から続き、特に現在は生活を反映して品目が豊かになっていることも分かった。巡礼期も4月1日から4月9日に定められ、千人詣は1年に1回の特別な行事となっている。

これら以外にも非日常化の仕掛けは「服装」「記録」などに見られた。服装は自分を日常の自分と周囲から切り離し、また記録は巡礼に特別制を付与している。

ところが、この非日常空間を作り出す仕掛けの

いくつかは現在の千人詣では崩壊しつつある。

仕掛けの崩壊には、第一に車の使用があげられる。車の使用によって歩く行為が減少し、見知らぬ土地に気を止めることも見知った土地を振り返る機会も減ってしまう。また、車の内部は日常と何ら変わることのない景色だ。

さらにここでは一つの皮肉な現象を指摘することができる。お参り目的の人は車を使うことに抵抗を感じず、歩くことが目的の人は車を使いたがらないのである。例えば千人詣の常連で、御詠歌と踊りを正式に習っている女性は「車を使ったから、早く帰ることができた今年は良かった。」と語っていた。お参りを目的の中心に据えている人は札所に参ることが重要で、それに直接関係のない歩くという行為にはこだわらない。だからお参りさえしっかりできれば、早い時間に終わるに越したことはないというわけだ。しかし歩きたいという人にとっては札所を廻ることはさほど意味をもたず、その過程を歩く行為こそ重要であるから、車を使ってしまっただけではまるで意味がない。つまり信仰心に基づく巡礼者が、宗教に欠かせない聖性を紡ぎだす歩く行為にこだわらないのに対し、歩くことを楽しもうとする人達の目指す行為が結果的に非日常空間を作り出すという非常に皮肉な現象が生じているのだ。

仕掛けの崩壊の2点目として、宿泊の習慣が途絶えたことが上げられる。これによって巡礼中に形成される非日常的時間が1日ごとに途切れることとなった。宿泊をしていた頃の千人詣では9日間から11日間の間継続した非日常空間に置かれたはずの巡礼者が、現在では1日の区切りにおいて毎回日常に引き戻されるのだから、日常からの脱却と言う点では明らかに効果は少なくなっている。

さらに3点目として接待の衰退がある。第3章で述べたとおり、物が豊富になった時代を反映して接待品は豪華になっているが、一方では接待を断る世話人も増えてきている。

このようにいくつかの非日常空間を演出するための仕掛けが衰えてしまったため、巡礼空間に日常性が浸出し非日常性が薄れつつあることが分かる。

第五章 考察

では、一体なぜ地方巡礼の持つ非日常化の仕掛けが衰退してきたのだろうか。その背景にあるのは何であろうか。

地方巡礼が栄えた頃、日常からの脱却は経済的にも社会的にも容易ではなかった。だからこそ人々は仕掛けを駆使し、効率よく「信仰」と「娯楽」の両方を手にすることのできる非日常空間を作り出すことに力を入れた。特に本元の四国遍路と比較して地方巡礼ならではの魅力は、身近にこの非日常空間を「つくりだす」ところにあったと考える。

しかし現代では日常からの身近な脱却方法がその他に数多く存在する。特に娯楽に関しては、旅行、映画、レジャーランド、ゲーム等、非日常的経験をもたらしてくれる空間が多彩に存在する。しかもそれらは他者から与えられる非日常空間であったり、非日常空間に入る行程が容易であったりと、非常に手に入れやすいものである。例えばゲームや映画のようなヴァーチャルリアリティー世界で非日常的経験を得ようとするとき、受け手側からの能動的なりアクションはほとんど必要ではない。また、旅行やレジャーランドのような日常とは場所を隔てた娯楽においても、車や電車を使えば時間と労力を短縮できる。

それは宗教的欲求においても同様だ。現在では「小さな代用品」である地元の霊場に行かなくても、発達した交通機関を利用して比較的たやすく本家の四国八十八ヶ所霊場に行くことができる。

つまり非日常的経験を容易に手にできるようになった我々は、非日常空間をわざわざ自分で正反対の日常空間から立ち上げなくても済んでしまうのである。様々な仕掛けを駆使してまで非日常空間を演出する必要性が以前よりずっと少なくなった状況が現代であると言えよう。

そしてそれがゆえ、現代の私達には非日常空間を自らの手で演出するという能力が失われつつあるのではないかと私は考える。

娯楽と言う側面から見れば、先にあげた旅行、映画、レジャーランド、ゲーム等現在の非日常空間を楽しもうとするとき、私たちは「素のまま」でよい。あえて自分から働きかけなくてもそこに存在する非日常空間に入ることができる。これは自分達から能動的に働きかけないと維持できない地方巡礼の非日常空間とは対照的である。他者から与えられる非日常的経験に慣れてしまった現代の人々は自分を、ひいては自分を取り巻く環境を異化する経験が少なくなっている。そのため日常空間の近くに非日常空間を作り出すという楽しみを味わうことができない。

宗教の側面からも同じである。地方巡礼には聖性という非日常的なファクターを日常に混在させる役割がある。なぜなら地方巡礼は非日常空間を日常と紙一重の場所に作り出すからだ。確かにそれは日常に左右されやすいという弱点をもつが、逆に宗教性を「普通の生活」につなぎとめる力があると考える。しかし現代は宗教が「普通の生活」に根付いていない。それは千人詣における参加者

の減少や巡礼の動機に信仰心をあげる人の少なさから見てとれる。その理由には、現代の人々が聖性を生み出せる非日常空間を日常から作り出せないということもあるのではないだろうか。

現代の人々は「聖」においても「俗」においても、非日常空間を自らの手でつくることができなくなってしまった。そしてその代わりに日常以外の場所に用意された非日常空間を享受するようになったのである。ところがこの用意された非日常空間は、受け手側によって非日常性を失ってしまう。非日常空間を作る経験が乏しい人間は、用意された非日常空間に入るとき、自分を異化せず日常の状態のままに入ってしまう。たとえあらかじめ非日常性を備えた空間であろうと、求める側の人間が日常感覚を持ち込めば、得られる非日常経験はどうしても希薄にならざるを得ない。結果として日常と非日常はボーダーレス化が進行してしまい、受けて側は非日常性を感じず、空間から非日常性は失われてしまうこととなる。そうなれば受けたはより強い非日常性を求めて、日常からかけ離れた世界への要求が加速する。つまり自らを異化することなく「素のまま」で非日常性を外部にばかり求めれば、より強力な非日常性を求めて日常からの乖離をエスカレートさせるという方法に頼らざるを得なくなる。そして日常からあまりにかけ離れた場所にしか、非日常性を見つけれなくなってしまうのである。

例えば近年極端な教えを説く新興宗教団体の存在が問題視されている。これは宗教というものが現代の日本人の生活に内在化されていないことの結果と考えられる。世界的に宗教が存在することを考えれば、宗教は人間にとって欠かせず、むしろ今の日本のような宗教性の乏しい状況のほうが例

外的である。こうした現代の日本で聖性を求めようとしても、宗教と「普通の生活」が結びついていないため日常では満たされにくい。すなわち、現代の日本人は身近な宗教を失い、聖性を求めるあまり日常とは極端にかけ離れた方向へ非日常空間を求めざるを得ない状況に置かれている。この状況が人を反社会的な新興宗教に駆り立てる理由の一端を担っていると言っても過言ではないだろう。

このように与えられる非日常空間になれてしまった現代人は、非日常性を得るために日常からの乖離をエスカレートさせざるを得ない悪循環に陥っている。この現代の非日常に対するアプローチ方法は、あくまで日常を自らの手で変貌させながら非日常空間で信仰心を満たし娯楽を得ようと試みる地方巡礼の方法とは大きく隔たっている。昔の人々は地方巡礼に見られるような仕掛けを駆使して、自ら「日常」と「非日常」の境界をつくりだしていた。このような地方巡礼の非日常性の求め方は、今こそもう一度見直す価値があるのではないだろうか。

注釈

註1 最近では交通手段が増えたため徒歩には限定されない。

註2 「遍路」とは四国八十八ヶ所霊場のみに使用される巡礼、または巡礼者を指す語である。なお、二市一郡新四国霊場の千人詣の参加者も「お遍路さん」と呼ばれることがあった。しかし混乱を避けるため本論文では千人詣の参加者に対して「遍路」という言葉は使用しない。

註3 袖のない白い羽織。背中に「南無大師遍照

- 金剛」などの文字が入る。
- 註 4 上部が四角形の白木の杖。大師の分身とされている。
- 註 5 ただし、地方霊場の創設と消滅は頻繁に起こり、特に近年は五島列島で300年続いた地方霊場が昨年途絶えてしまったことに代表されるように、地方霊場の衰退に加速がかかっているため正確に数を把握するのは困難と言える。
- 註 6 参加人数の変化によって10日間、もしくは11日間行なった時代もある。
- 註 7 全600巻の経文。明治30年に購入した大般若経を1988年に買い替えた。
- 註 8 大部の経文のそれぞれの巻について初め・中・終わりだけを読んで全部読んだことにし、次々に続く巻に移ること(1989 新明解国語辞典)
- 註 9 現在の門司区、小倉北区、小倉南区、八幡東区の大蔵にいたるまでをさす。
- 註 10 行事の際、信者などが寺に泊まること。
- 註 11 四国八十八ヶ所札状の格札所の御堂の前からいただいてきた砂を地方霊場の札所の土地に埋めると、埋められた砂の上にたつことによって、四国遍路に行くのと同等の功德を受けることができると言われている。
- 註 12 四国霊場には1番から88番までの札所以外にも札所があり、それらを番外の札所と言う。「番奥ノ院」は後にすることを意味する。二市一郡新四国霊場でも、番号のない札所は番外の札所と呼ばれている。
- 註 13 その日最後の巡礼をすること。
- 註 14 廻る札所の順番は1年ごとに逆になる。つまり来年は今年9日の最後に廻った札所から始まり、今年1日の最初に廻った札所に向かって逆方向に歩いていくことになる。
- 註 15 東谷新四国霊場には東谷新四国大師講が存在するが、現在活動休止中である。
- 註 16 「弟子某甲(デシムコウ) 尽未来際(ジンミライサイ) 帰依仏 帰依法 帰依僧」(大法輪閣編集部 1997)
- 註 17 「弟子某甲 尽未来際 不殺生 不偷盗(フユウトウ) 不邪淫不妄語 不綺語 不悪口(ファツク) 不両舌 不慳貧 不瞋恚(フシンニ) 不邪見」(大法輪閣編集部 1997)
- 註 18 正式名称は「輪袈裟」。輪のようにして首から胸に下げる、小型の袈裟(1989 新明解国語辞典)。
- 註 19 斜め掛けの白いかばんで「同行人二人」「二市一郡大師講」といった文字が入っている。
- 註 20 月1回、平尾台や長野城跡など半日くらいで歩き回れるところに行く集まり。
- 註 21 毎月定められた日だけに特定の場所で行なう巡礼。廻る日や場所の異なる巡礼集団が数多く存在する。